

# 百舌鳥・古市古墳群出現前夜の 朝鮮半島南部と倭の対外関係

井 上 主 税

A study on the interaction of the southern Korean peninsula  
(Gaya) and the Yamato Kingdom (Wa) at the dawn of the  
appearance of Mozu-Furuichi Kofun Group

INOUE Chikara

本稿에서는 고고자료를 통해 고분시대 전기부터 중기 초반의 한반도 남부 (가야) 와 왜의 대외관계를 고찰하였다.

3세기 후반이 되면 낙랑군의 약체화에 의해 진·변한은 기존 유통 구조를 벗어나 왜로 향하는 새로운 철소재의 유통 루트를 개발하였고, 이에 왜에서는 출현기의 전방후원분 (前方後円墳) 에서 다량의 철제무기나 농공구가 부장되는 현상이 확인된다. 한반도 남부에서 출현하는 하지기 (土師器) 계 토기는 철소재를 입수하기 위해 왜인들이 바다를 건너온 것을 의미한다. 313년에 낙랑군·대방군이 축출되면서 동아시아의 교역체계에 큰 변동이 일어났는데, 대성동고분군에는 위세품으로 생각되는 왜계유물이 부장되기 시작하며, 금관국과 왜의 정치적인 교섭이 급속도로 확대되었다. 그 후 4세기 후엽에 백제와 신라가 국제무대로 등장하면서 왜는 고구려와 백제의 대립항쟁에 관여하게 되었다. 그 결과 한반도 남부와외교나 전쟁을 의식하여 새롭게 가와치 (河内) 평야로 대형고분군의 묘역을 이동하였고, 또한 오키노시마 (沖ノ島) 제사를 개시하는 등의 커다란 변화를 맞이하였다.

중요어 : 왜계유물, 대외관계, 모즈・후루이치고분군, 가야, 백제

## はじめに

河内平野に百舌鳥・古市古墳群が築造された古墳時代中期 (4世紀末～5世紀) は、朝鮮半島から技術者集団が渡来し、鍛冶・金工・窯業などの生産技術、騎馬の技術、土木技術などが移転された時期である。渡来人の存在は、考古資料からだけでなく、やや不確実ではあるが『日本書紀』応神天皇20年9月条には、倭漢直の祖である阿知使主とその子の都加使主が党類17郡を率いてやってきたとある。

本稿では、古墳時代前期から百舌鳥・古市古墳群が出現する古墳時代中期初めまでの朝鮮半島南部と倭の対外関係を考古資料から検討する。朝鮮半島では南海岸から東南海岸にかけて分



図1 関連遺跡の分布図

布する集落遺跡や古墳から、倭との交流関係をうかがうことができる資料（倭系遺物）が多く確認されている。なかでも、金海および釜山を中心とする東南海岸一帯は古くから倭との交流窓口であり、関連する諸問題を解決するうえで最も重要な地域である（図1）。倭系遺物には、土師器系土器、巴形銅器、鏃形石製品、紡錘車形石製品、筒形石製品、石釧、靱、堅櫛、銅鏃、貝製品などがある。これらの資料から通史的な検討を行うことにより、対外関係の変遷や画期を把握することが可能となる。ただし、前提となるのが外なる視点であり、研究の視座は朝鮮半島南部に据えて、その政治的・社会的変動を念頭に置きながら検討を進める。<sup>1)</sup>

### 1. 3世紀後半—郡県の弱体化と諸勢力の成長

中国では265年に魏にかかわって晋が起り、『晋書』武帝紀によると翌年に倭国は遣使貢献したが、この朝貢を最後に中国王朝との通交関係は中断している。

一方、晋本国への積極的な通交を展開していた馬韓や辰韓の様子も、277年から『晋書』にみられるが、290年の交渉が最後となっている。このことは、おそらく291年から306年まで続いた八王の乱によって西晋との交渉が難しく、続いて永嘉の乱が起り、316年に匈奴の攻撃によって西晋が滅亡するまで混乱した状態が続いたためとみられる。

晋本国と朝貢関係を持つほどに成長した政治体となった馬韓や辰韓の一方で、『晋書』の記録にはみられない弁辰（弁韓）では、3世紀後半に大成洞29号墳（図2）が築造され、これを

1) 本稿は、(井上2006)と(井上2014b)をもとに、新出資料を加えて検討をおこなった。井上主税2006『嶺南地方 출토 倭系遺物로 본 한일교섭』(경북대학교 문학박사 학위논문)、井上主税2014b『朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係』学生社

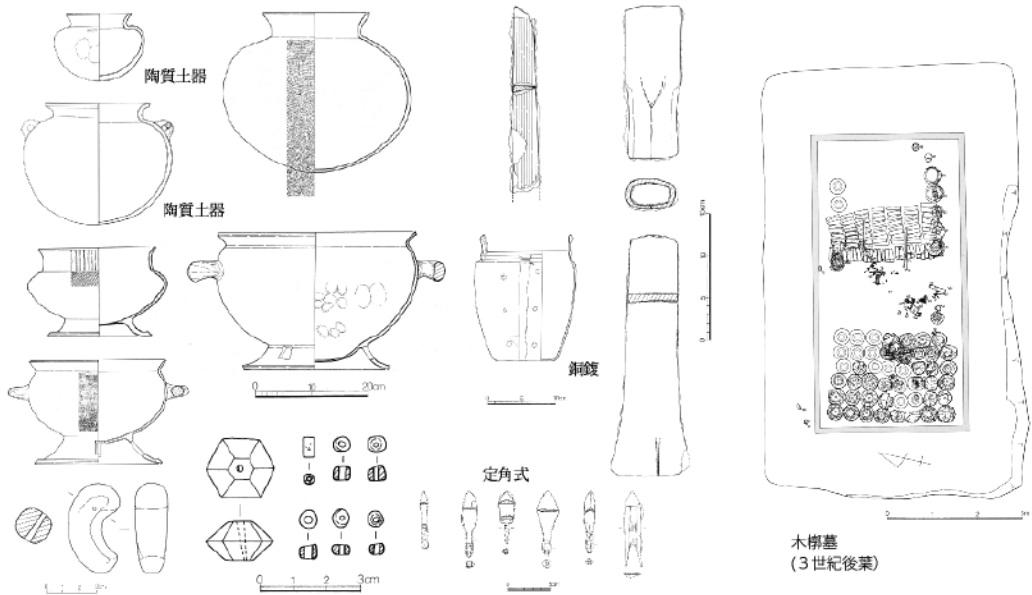


図2 大成洞 29 号墳（慶星大学校博物館 2000b『金海大成洞古墳群Ⅱ』）

金官国の成立とみる点に大きな意見の相違はないようである。申敬澈氏は大成洞 29 号墳を、土器の多量副葬（厚葬）、陶質土器、殉葬、金工品が最初にみられた古墳として評価する。これらの考古資料にみられる変革が特定住民（夫余族）の移住によってなされ、彼らが新たな支配者集団になったとみた。<sup>2)</sup> 申氏のこのような見解に対しては、大成洞 29 号墳にみられる中国北方系とした要素そのものへの批判が、さらには考古資料にみられる変化が特定住民の移住の結果ではなく、交易や交渉による産物ではないかとの指摘がなされた。<sup>3)</sup> 大成洞 29 号墳では楽浪郡を通じて流入した銅鍔のほか、倭系遺物として定角式鉄鍔が副葬されている。<sup>4)</sup>

一方、この頃より朝鮮半島南部では土師器系土器が出現しており、釜山東萊貝塚では 3 世紀後葉から 4 世紀前葉にかけての甕・壺・鉢・小型器台・小型丸底土器などが確認されている（図 3）。これは『魏志』韓伝にみられる、弁辰で産出される鉄を入手するため、韓や濊の諸民族とともに倭から人々がやってきたという状況をあらわす可能性がある。土師器系土器の多くが鍛冶遺構ないしは、鍛冶関連遺物が出土した遺跡から出土した点もこれを裏付ける。<sup>5)</sup> これと結びつくのが当時の朝鮮半島南部と倭の状況である。村上恭通氏は当時楽浪郡へ鉄の貢納を負っ

2) 慶星大学校博物館 2000a『大成洞古墳群Ⅰ』、慶星大学校博物館 2000b『大成洞古墳群Ⅱ』

3) 김영민 2008『金官加耶의 考古学的 研究』（부산대학교 문학박사 학위논문）

4) 大成洞 29 号墳などから出土した定角式鉄鍔を倭系遺物の出現とみる見解（홍보식 2014）もあるが、ヤマト王権中枢と関連づけるのは難しいと考える。홍보식 2014「금관가야의 국제교류와 외래계 유물」『외래계 유물로 본 금관가야의 국제교류와 사회구조』

5) 井上主税 2014a「朝鮮半島南部における鉄・鉄器生産遺跡と倭系遺物」『韓式土器研究』XIII

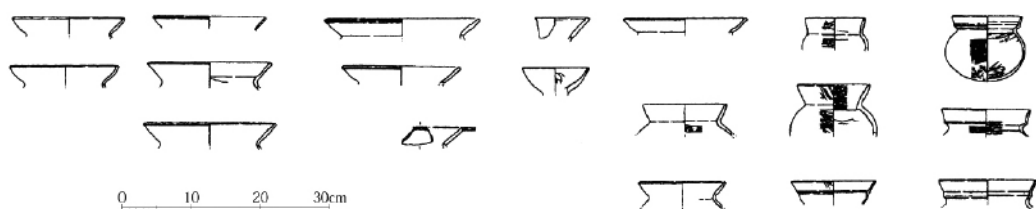


図3 東萊貝塚出土の土師器系土器  
(釜山広域市立博物館福泉分館 1997『釜山の三韓時代の遺蹟と遺物 I—東萊貝塚—』)

ていた朝鮮半島南部の弁韓・辰韓地域は、郡の弱体化に伴ってその責務を逃れるようになり、結果的に弁・辰韓みずから鉄の生産・流通をコントロールし、倭人社会に届く鉄の量も増大したとみた。<sup>6)</sup> 孫明助氏もこれと似た見解を提示している。3世紀後半の国際情勢において、楽浪郡の勢力が衰退するとともに、弁韓地域は既存の流通構造から抜け出し、倭へ向かう新たな鉄の流通ルートを開発した。すなわち、鉄器の主要輸出先であった楽浪郡の弱体化により、新たな輸出先が倭に変わったという。<sup>7)</sup> ここで楽浪郡と弁・辰韓の関係を「貢納」や「責務」などの用語で表現できるかは疑問だが、いずれにせよ主要交易相手の変化を想定した点は注目される。倭の状況を見ると、この時期は定型化した前方後円墳の出現期であり、大量の鉄製武器・農工具を副葬する現象がみられる。また、継続して前方後円墳をはじめとする大型古墳に鉄器が副葬されることから、以後持続的な鉄供給ルートが確保されたと考えられる。このような背景のもと、両地域で活発な交易がおこなわれたものとみられる。

## 2. 4世紀

### 2.1 4世紀前葉～中葉—金官国とヤマト王権の交渉

金官国とヤマト王権の交渉が主になされた時期である。<sup>8)</sup> 4世紀に入ると、鍬形石製品などの石製品や巴形銅器、銅鍬といった近畿地方を中心に分布する倭系の威信財が、大成洞古墳群に副葬され始める(図4)。その始まりは4世紀前葉の大成洞18号墳とみられ、紡錘車形石製品やヒスイ製勾玉が副葬されている。このうち、丁字頭ヒスイ製勾玉はヤマト王権との関わりが指摘できる遺物である。定型化した前方後円墳が出現した後、丁字頭ヒスイ製勾玉の副葬は大和盆地東南部の桜井茶臼山古墳から確認できる。一方、土器は北部九州の布留式系土器が多く、依然としてこの地域との関係が重要であったことを示唆する。すなわち、北部九州を窓口とす

6) 村上恭通 1999『倭人と鉄の考古学』青木書店

7) 손명조 2003「加耶의 鉄生産과 流通」『가야 고고학의 새로운 조명』해안.

8) 井上主税 2006 前掲書、井上主税 2014b 前掲書、井上主税 2020「4世紀におけるヤマト王権と加耶の対外交流—王権内の動向に着目して—」『慶北大学校考古人類学科 40周年記念考古学論叢』

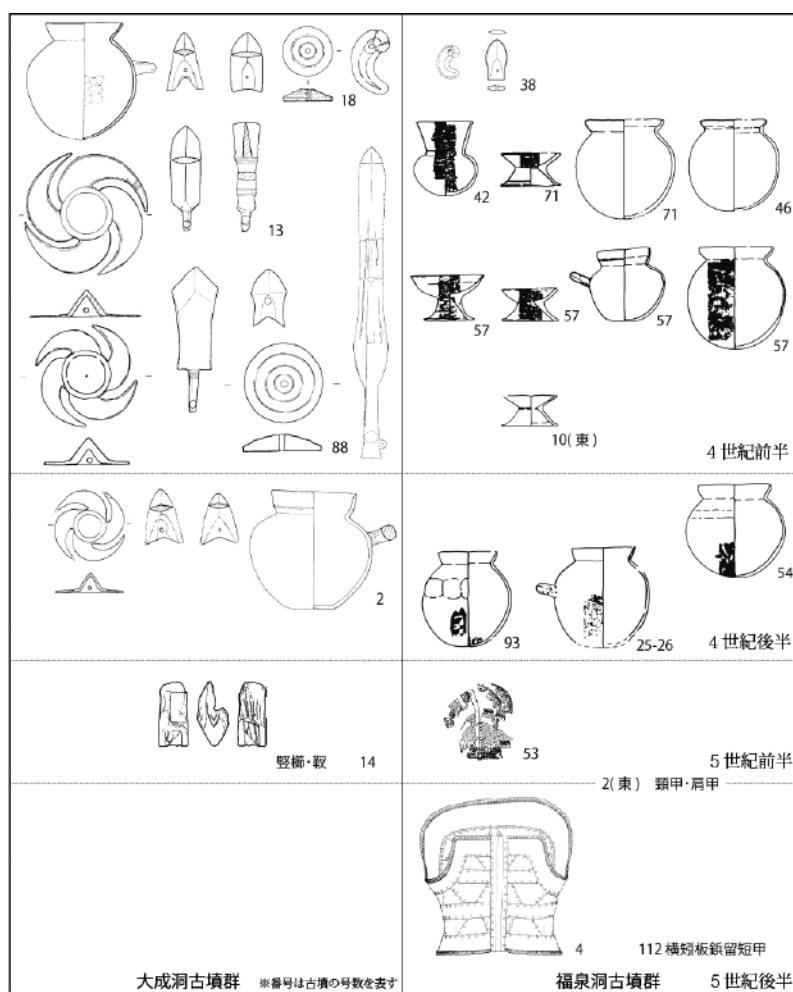


図4 大成洞・福泉洞古墳群出土の倭系遺物（縮尺不同、各報告書より作成）

るヤマト王権と金官国間で活発な交渉がなされたといえる。

威信財とみられる倭系遺物の出現は、313年の楽浪郡・帶方郡の滅亡によって、東アジアの交易体系において大きな変化が起こったこと<sup>9)</sup>が関連するものとみられる。また、大成洞古墳群では倭系遺物のみならず、中国東北地方との対外交渉をあらわす、銅鍍や銅洗などの青銅製容器類や三燕系馬具がほぼ同時期の王墓に副葬されており、<sup>10)</sup>この間の変動を示唆する。

また、この時期はそれまでとは異なり、各政治体間の物資の交流は当該地域の支配階級間の

9) 李賢恵 1998『韓国 古代의 생산과 교역』一潮閣

10) 심재용 2016「金官加耶의 外来系 威信品 受用과 意味」『嶺南考古學』74, 김일규 2016「금관가야와 중국의 교류」『금관가야 고분의 축조세력과 대외교류』국립가야문화재연구소

外交、軍事的な問題と密接に結びつき進行した。<sup>11)</sup> すなわち、金官国との政治的な交渉がこの時期から急速に拡大したことをあらわす。

この4世紀初めという時期は楽浪・帯方郡が滅亡したため、東アジアの交易体系において大きな変化が起こった時期であり、先進地域である二郡を中心に組み上げられた既存の交易網は再編が不可避になり、それにより弁・辰韓地域で政治的な変動を呼び起こす根本的要因として作用したとみられる。<sup>12)</sup> それにともない対倭交渉の形態にも変化が起こり、金官国と倭との通交関係が強化されたのではないかと考える。<sup>13)</sup> このような金官国における威信財とみられる倭系遺物の出現は、大和盆地北部の佐紀古墳群の成立にやや先行すると考える。すなわち既往の研究とは異なり、大和盆地東南部勢力の時期から、朝鮮半島南部との政治的な交渉が成立していた可能性がある。

一方、倭における朝鮮半島（加耶）系遺物の出現は、筒形銅器や竪矧板革綴短甲、又鍬が副葬された大阪府紫金山古墳（4世紀前葉）を嚆矢とする。また初期段階には、京都府妙見山古墳（4世紀前葉）において筒形銅器と小札革綴冑が、京都府瓦谷1号墳（4世紀中葉）において方形板革綴短甲と小札革綴冑とが相伴しており、大和盆地東南部勢力と関係の深い中国系遺物とともに朝鮮半島系遺物が出土する例が散見される。このほか、朝鮮半島南部との交渉が3世紀代にさかのぼる可能性を示唆するのが、奈良県黒塚古墳や愛知県東之宮古墳から出土した儀杖形鉄製品（Y字形鉄製品）の存在である。4世紀の滋賀県安土瓢箪山古墳においても出土例が確認されている。古墳時代前期の玉杖は、弥生時代の鹿角製品や木製品をモデルとして成立したとされるが、鉄製の儀杖には、朝鮮半島東南部の有刺利器の影響が認められる。<sup>14)</sup> ただしこれらは有刺利器とは形態差があり、かつ個体差も大きいため、倭で製作されたと考えられるが、刺状の突起や蕨手文を模したとみられる円盤部などの特徴をもつ。

## 2.2 4世紀後葉―百済との通交開始と百舌鳥・古市古墳群の出現

その後、4世紀中頃すぎからの高句麗と百済の対立抗争によって、金官国などから鉄資源や先進文物を入手していた倭にもその影響が及んだ。

百済は369年、371年に高句麗と戦い、371年の戦いでは平壤城に攻め込み高句麗故国原王を戦死させた。翌年には東晋へ朝貢し、近肖古王とみられる百済王餘句は鎮東将軍・領楽浪太守に封ぜられた（『晋書』簡文帝）。これを機に、百済王と世子、もしくは百済王の世子（のちの近仇首王）が七支刀（奈良県天理市石上神宮所蔵）を倭王へ贈ったものとされる。

当時の百済の都は漢城にあり、漢江左岸に位置する風納土城と夢村土城が王城もしくは関連

11) 이현해 2001 前掲書

12) 주보돈 1998 『신라 지방통치체제의 정비과정과 촌락』 신서원

13) 一方、新羅（斯盧国）は金官国と異なり、二郡が滅亡した後、高句麗と結びつき新たな通交ルートを開拓し台頭した。すなわち、海上交通路に替わり陸上交通路というルートを開拓したとされる。주보돈 1998 前掲書

14) 大阪府立弥生文化博物館 2004 『大和王権と渡来人 3・4世紀の倭人社会』



する土城と考えられている。夢村土城の南西に位置する石村洞・可楽洞一帯の低丘陵には、積石塚と葺石封土墳からなる古墳群が造営されており、このうち石村洞3号墳が近肖古王の墓と推定されている。東西約51m、南北約48mを測る方壇階梯積石塚であり、百済積石塚のうち最大規模を誇る。副葬品として中国製青磁盤口壺や金製歩揺が出土した。

一方の新羅では、初期王号の1つである「麻立干」が出現した4世紀後半（『三国遺事』奈勿王）に、慶州では皇南洞109号墳3・4槨にみられるように積石木槨墳が出現し、各種金工品や新羅土器が副葬され始め、これらが新羅の国家形成過程と関連づけられている。<sup>15)</sup> また文献記録には、高句麗を介してであるが377年・382年前秦に朝貢したとある。

このように、百済と新羅がともに国際舞台に登場した時期でもあった。倭も百済王権との関係成立によって同様に国際政治の舞台に登場した。倭にとって百済との通交は先進文物の確保はもちろんであるが、それ以上に百済を通じて、中断していた中国王朝との通交再開に期待があったものと考えられる。結果的には、百済と高句麗の対立抗争に介入し、百済—加耶諸国—倭と高句麗—新羅の対立構図となった。

4世紀末になると、巴形銅器や鍔形石製品などの威信財というべき倭系遺物は、大成洞古墳群においてその副葬が終了する（図4）。この時期がヤマト王権と金官国との関係における一つの画期である。大成洞2号墳を最後に、大型木槨墓には巴形銅器や鍔形石製品が副葬されない。その一方で規模の劣る木槨墓において、5世紀前葉まで倭系遺物が少量副葬されるが、鹿角製刀装具や堅櫛、鞆でありその内容は異なっている。<sup>16)</sup> すなわち、倭との対外関係において再び変動が起こった可能性が高く、このことは先に述べた百済と倭との通交開始や高句麗の南下政策など、東アジア情勢の変化と密接に関連したものと思われる。

倭においても、河内平野に百舌鳥・古市古墳群が形成され始め、また沖ノ島祭祀が開始された時期とも一致しており、これらの情勢の変化と関連する現象といえる。おそらく大成洞古墳群の築造が中断されるまで金官国とヤマト王権との交渉は続いたと推測されるが、この関係を直接的に示唆する倭系遺物の存在は確認できない。日本列島側では5世紀初頭の兵庫県行者塚古墳から出土した鉄鋌や金銅製帯金具などがこの関係を裏付けている。

### 3. 5世紀前葉—ヤマト王権と朝鮮半島南部の対外関係の多様化

4世紀末から倭は百済と結び、「任那加羅（金官国）」などととともに共同作戦をとり、朝鮮半島東南部一帯に進出を図る。これに対し、新羅は高句麗に救援を求めたことが高句麗広開土王碑にみられる。<sup>17)</sup> 400年の高句麗歩騎5万の南下によって倭軍は退却し、「任那加羅（金官国）」

15) 李熙濬 1998『4～5세기 新羅의 考古学的研究』(서울대학교大学院文学博士学位論文)

16) 4世紀後葉に入っても土師器系土器は出土しており、釜山地域や金海地域に加えて、鎮海地域や馬山地域で出土例が確認されている。井上主税 2006 前掲書

17) この碑は、広開土王（在位 391～412 年）の功績を顕彰して、長寿王（在位 413～491 年）が 414 年に建

や「安羅（阿羅加耶）」にも打撃を与えたとある。考古資料から金官国の衰退は、大成洞古墳群において大型古墳の築造中断としてあらわれる。そして、これと軌を一にするかのように倭系遺物の副葬も終了した。

404 年には帯方の界（現在の京畿道・黄海南道）に侵入し、再び高句麗と交戦したが敗北したことで、朝鮮半島への進出は失敗に終わった。この後、倭は中国への遣使を再開しており、外交方針の転換がなされたようである。413 年の東晋への朝貢（『晋書』安帝紀など）が最初であり、これを讃による朝貢とみる見解には異見もある。421 年の讃による宋への遣使から、倭の五王は宋、齊、梁へ使者を派遣しており、「安東將軍 倭国王」などに冊封されている（『宋書』倭国伝など）。

一方、この時期は、ヤマト王権の所在する近畿地方中央部だけでなく、王権と結びつきが強い各地の遺跡では朝鮮半島から直接入手したとみられる文物や、渡来人の居住を示す痕跡が確認されるようになる。<sup>18)</sup> すなわち、朝鮮半島情勢が不安定な 5 世紀を前後する時期から渡来人たちの存在が確認できる。出土遺物の系譜から、その故地は金官国のみならず、安羅国（阿羅加耶）や馬韓・百濟、新羅など多様であったことがうかがえる。渡来人たちによって、近畿地方を中心に朝鮮半島から日本列島へさまざまなモノ、技術、思想などが伝わった<sup>19)</sup> が、渡来文化と技術の移転に関して、当初はヤマト王権の直轄で行われる場合と各地の有力勢力が独自に渡来人を抱えて生産活動を行う場合の双方が併存していたとみられる。<sup>20)</sup>

5 世紀に入り、近畿地方中央部において渡来系鍛冶工人が出現し、武具や馬具が生産されるなど鉄製品の生産量が増大していく。この 5 世紀代の膨大な鉄器生産を支える鉄素材の供給が、朝鮮半島のどの地域からなされたのかは重要な問題である。孫明助氏は、4 世紀まで鉄生産を主導した金官国の生産集団は瓦解し、新羅勢力への吸収または他地域への離脱など、再編されたものとみる。<sup>21)</sup> 実際に、鉄・鉄器生産遺跡における倭系遺物の出土は、金官国衰退後には全羅道地域などで確認されているが（図 5）、非常に限定的である。この時期の鉄素材の入手には、朝鮮半島南部における倭系遺物や倭系古墳の分布から、おそらく釜山地域<sup>22)</sup> や西部慶南地域（加耶西部）、梁山江流域等が関連したと考えられる。<sup>23)</sup>

---

てたものであり、顕彰碑という性格からその内容を全面的に信用することはできない。

18) 田中史生 2016『国際交易の古代列島』角川選書

19) 渡来人たちを通じて伝わったものとして、鍛冶技術、金工技術、製陶技術、騎乗文化（馬飼いや含む）などがあり、須恵器、冠・帯金具・飾履・垂飾付耳飾りといった装身具（金工品）、馬具、鍛冶道具などの考古資料がこれを裏付ける。また、渡来人たちの生活の痕跡である、韓式系土器や大壁建物、オンドル、カマド（カマド焚口枠）などが確認されている。

20) 花田勝広 2002『古代の鉄生産と渡来人—倭政権の形成と生産組織』雄山閣

21) 손명조 2003 前掲書

22) 5 世紀以降、釜山地域は新羅の間接支配下に入っており、鉄素材の入手に関してこれを新羅からとみるかは検討の余地がある。

23) 井上 2014a 前掲書、井上主税 2017「朝鮮半島初期鉄器時代～三国時代の鉄・鉄器生産遺跡出土の倭系遺物について」『日本考古学協会第 83 回総会研究発表要旨』



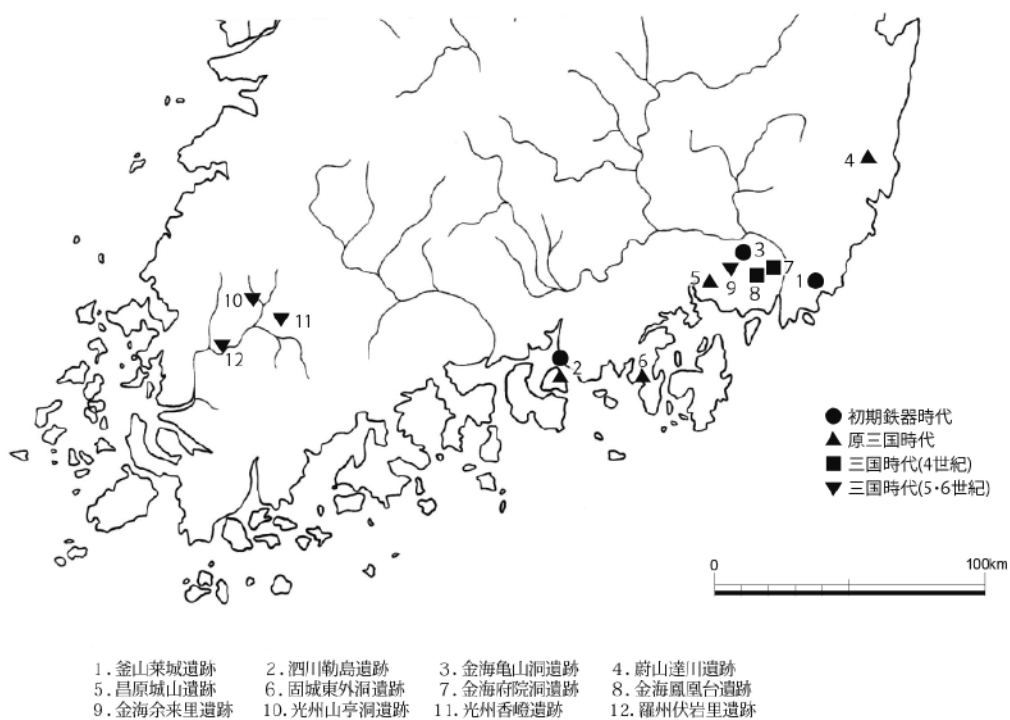


図5 倭系遺物出土の鉄・鉄器生産遺跡の分布（初期鉄器時代～三国時代）

以上のような様相から、朝鮮半島と倭の対外関係はそれまでの金官国との交渉だけではなく、多様化が進むことから、古代日朝関係において5世紀前葉の時期を一つの画期と評価することができる。これを裏付けるように、5世紀中葉以降の倭系遺物は、それまでの出土様相とは大きく異なってくる。分布範囲が広がり、金海・釜山を中心とする朝鮮半島東南部のみならず、西部慶南地域（加耶西部）や朝鮮半島西南部の榮山江流域などへも及んでいる。また、新羅地域でも倭系遺物が確認されている。さらに大きな変化としては倭系遺物の出土だけでなく、墳丘形態（前方後円形）や葺石、横穴式石室のような遺構（構造物）がみられる点である。倭系遺物の種類も増え、須恵器、帶金式甲冑、イモガイ製雲珠（南海諸島産の貝）、木棺材（コウヤマキ）、埴輪、石製模造品、倭鏡、鹿角製刀装具などが確認される。

## おわりに

本稿では、古墳時代前期から百舌鳥・古市古墳群が出現する古墳時代中期初めまでの朝鮮半島南部と倭の対外関係の変遷を、出土した倭系遺物を中心に検討した。倭系遺物に関するこれ

までの研究は特定の遺物や地域に限定したものが多く、通史的かつ総合的な研究がなされることがなかった。交渉関係をあらわす考古資料は断片的な情報も多いが、韓国国内における2000年以降の発掘件数の増加とともに関連資料は蓄積されており、今後も引き続き詳細な検討が求められている。また、日本列島出土の朝鮮半島系遺物に関する認識も格段に飛躍しており、両者をつきあわせて改めて検討する必要があるだろう。<sup>24)</sup> なかでも、ヤマト王権の成立や伸長といった過程は、加耶をはじめとする朝鮮半島南部の諸勢力の成長過程と非常に共時的な様相を示している。これらは中国も含めた東アジア世界の動向と密接に関連しており、広く全体を見渡した研究が必要といえる。

---

24) 筆者は、近畿地方中央部の古墳を中心に、古墳時代中期前半における朝鮮半島系遺物の副葬状況を検討している。この時期に朝鮮半島系遺物が副葬された古墳の分布やその性格を明らかにすることは、当時の対外関係や政治的状况を解明するうえで重要な課題と考える。

井上主税 2021 「古墳時代中期前半の河内平野における朝鮮半島系遺物の流入に関する考察」『関西大学東西学術研究所紀要』第54輯 関西大学東西学術研究所